日常生活的実践の戦術
——北京市残街の道端経営現象を例に

王 傑文
WANG Jiewen
翻訳：西村 真志葉

はじめに

道端経営とは、特定の個人あるいは集団が公共空間（都市道路や橋梁、広場等）を占拠し、私利を図る行為を指す[訳注1]。現代中国の都市部には、この道端経営という現象が普遍的に存在する。中国の都市計画と管理に関する基本的な法制度によれば、道端経営は違法行為であり、各都市の行政管理・法執行部署（以下、城管）は職権によりこれを撤去することができる。実際、道端経営者と城管の間の対立は深刻で、時に激しい衝突が生じることもある。

都市計画や法の整備、執行を司る者の立場から言えば、都市の公共空間には公共性が備わっており、いかなる個人、集団であっても、管轄部署の許可や委託がない状態で、臨時的あるいは長期的に公共空間を占拠し経済活動を営んではならない。これに反する行為はすべて違法な道端経営であり、取り締まりの対象となる。道端経営の道という文字には公共性という属性が含まれており、誰であろうとこれを独占する権利はない。しかし、道端経営者の立場から見れば、あらゆる公共空間は歴史的に、社会的に形成されたものであり、都市化が進むなかで絶えず公共空間になっていった（becoming）のである。彼らのような道端経営者は、ある公共空間のそのように実在する（being）景観の構築過程に参与したのであり、つまり公共空間の一部に属するものなのである。また、都市管理者と道端経営者はいずれも市民の集団的利益、即ちすべての公共空間が市民の家庭生活や仕事、休暇に普遍的な利便性と心地よさを提供するということに、寄与しなければならない。しかし、道端経営者、市民集団、都市管理者、いずれも利益の多様性、対立性、特殊性を内に孕んでいる。したがって、公共空間が原則上公共性を有していようとも、実践の上ではしばしば個の侵略と占拠の中に埋没してしまうのである。

中国の大小各都市に遍在する道端経営現象とそこに表現される公益と私利の争いを解釈する際、フランス人歴史学者ミシェル・ド・セルトーが提示した戦略と戦術という概念は非常に啓発的である。いわゆる戦略とは規範的フレームであり、場所あるいは言語の面で、ある種の強制的、規則的な秩序を制定し、制御し、そして強要する。一方の戦術とは、こうした秩序的な戦略（寄主）の助けを借りて、普通の人々がそれらを使用し、操作し、変更する使用方法（寄生物）を指す［Certeau 1988：XVlll-XX］。セルトーにとって、日常生活研究の革新的任務とは、異なるコンテクスト下で絶えず行われるこうした再使用の方式、つまり、日常生活の実践者が場としての他者（戦略）の助けを借りて行う様々な戦術を描くことである。彼はこうした戦術が固有の形式と創造性を有し、いつも密やかに再生産と再構築を行っていると肯定的に評している。表面上、都市計

画と道端経営間の対立は、セルトーが言うところの戦略と戦術の対立と似ている。だが、両者は本質的にはまったく性質が異なり、ある種の風刺的な意味合いすらも含んでいる。

本稿では、北京市朝陽区定福庄村残街の道端経営現象に関する描写を通じて、以下の3つの問題を論じてみたい。

（1）セルトーの日常生活の戦術をめぐる思想は、中国の現代都市の日常生活的実践の分析に応用可能か

（2）中国の現代都市に遍在する道端経営にはどんな性質があるのか

（3）民俗学はどのようにして理想的な日常生活的実践の構築に参与すべきか

1. 残街の日常

北京市朝陽区定福庄村の東街と西街の間には東西を貫く道路が一本走っており、現地の人はこれを残街と呼んでいる。残街の北側は電建南院小区、南側はピアノ工場や煤炭幹部管理学院宿舎、金物工場、水電学校職員宿舎等の企業や宿舎から成る低層建築物地区である。また東側は中国伝媒大学の西門に、西側は定福庄西街に、それぞれ面している。

2005年前後、朝陽区の行政管理部署が幅拡張整備工事を行ったことで、残街の主要道路は比較的余裕のある4車線になったが、道路上に明確な交通標識は設けられないままだった。車道の両側には約4メートル幅の歩道も整備された。景観維持のため、3から5メートル毎に街路樹も植えられたので、夏には涼しい木陰が落ちる。公共道路の実際の基準に照らし合わせてみても、残街は住民の移動に関する需要を完全に満たすものである。言い換えれば、都市道路の規格と設計の面で、残街のハード的な整備状況は基準に見合っている。ところが実際は、残街では毎日頻繁に渋滞現象が生じているのである。

残街を歩くと、歩道の両側にある本来居住用であるはずの低層ビルが、住民によって勝手に商業用に改装されているのが目に入る。住宅の商用面積を拡大するために、経営者たちはこぞって歩道を占拠しているのである。占拠の具体的な戦術はさまざまで、門を外へ向けて大きく開ける者、歩道上に各種設備を設置する者、入口まで誘導ロープを設ける者、テーブルと椅子を歩道に並べる者などがいる。各種商品や生活用品だけでなく、廃棄処分された椅子やテーブル、車、岩等を並べて長期的に歩道を占拠する者までいる。まさに「人間の知恵は尽きることがない」という言葉そのままに、道端経営者の戦術は非常に豊かで、終わりが見えない。本来歩道として存在していた公共空間はその公共性をほぼ喪失しており、歩行者が歩道を普通に通れないのが現状である。

居住用ビルが住民の手で勝手に商用空間へ改造されていることで、店舗周囲を流動し、そこに留まる人々の数も自然と増加した。また、商店、顧客、通行人それぞれが交通手段として用いるトラックや自家用車、バイク、自転車、三輪車等が、歩道や車道に所狭しと停められている。一時停車する貨物トラックやゴミ収集車はしばしば交通渋滞を引き起こし、歩道と車道が臨時的な駐車場と化す。これにより、近くの居住区に出入りする住民や通行人、自転車、三輪車、自動車、野良犬、いずれも周りをうかがいながら、隙間を縫うように車道を行き来することになる。

利用者も不便を感じているには違いないだろうが、しかし、彼らはこうした通行・出入りの仕方にすっかり慣れてしまっているようだ。ここを通る人々は、渋滞に巻き込まれたドライバーが憎らし気にクラクションを鳴らし、罵詈雑言でうっぷんを晴らす様をよく見かけるだろう。車と

接触し、あるいはそれに驚いて、ドライバーと口論になる通行人もいるかもしれない。スリを警戒して神経をとがらせている者もいるだろう。だが10数年が瞬く間に過ぎ去ってみれば、ここの人々はいぜんと幸せに暮らしている。道端経営者に対し、異議申し立てをする者はごくわずかである。たとえば、残街中段の北側には、ある果物売りの屋台が歩道と一部車道を長期的に占拠しており、そのせいで車同士のすれ違いが難しくなっている。しかし、ドライバーは果物売りの違法行為や公共道徳の欠如を非難することはなく、慣れたようにドライバー同士で怒りに満ちたまなざしを向け合い、悪態をつき、喧嘩をする。そして当の果物売りは道端に立って、何の罪もない面持ちで高みの見物をしているのである。

2. 残街の日常の形成

今日の残街の容貌は歴史的に作られたものである。2003年以前、残街はまだ定福庄中街と呼ばれ、中国伝媒大学の白楊大道に面していた。当時、白楊大道の南半分が中国伝媒大学の前身北京広播学院に属し、残り北半分は煤炭幹部管理学院に属していた。2004年、この2つの教育機関が合併し、今日の中国伝媒大学が設立されると、本来境界線となっていた中間の道路も、同大学の南北両院の間を走る白楊大道へと変わった。そしてその時から、白楊大道の最西端に中国伝媒大学の西門が設置されるようになったのである。

中国伝媒大学の西門新設は、定福庄中街の住民に商業チャンスをもたらした。2004年以降、住民たちがこぞって違法建築を行った結果、定福庄中街は朝陽区でも有名な違法建築街道となった。ここの住民は一夜にして54の簡易店舗を建て、両側の歩道を全部占拠した、という誇張された言い方まである。朝陽区の城管も一部住民の訴えに押される形で、これらの違法建築物について何度もしらみつぶしに撤去を試みた。だが城管が去ってしまえば、違法建築はより早く、より立派に再建されるのである。

公共空間を組織的に占拠し、さまざまな理由をつけてその違法行為を弁解しているのは、ここの住民たちである（計35戸世帯とのこと）。そのうち一部は障がい者だが、より多いのが失業者である。彼らは生活のためにコミュニティの住民委員会等に頼んで回ったが、支援を得られなかった。そんな折、中国伝媒大学の設立に立ち会うことになったのである。彼らはここで商店を営み、生計を立てることにした。聞けば、彼らは都市計画を管轄する部署に支持してもらえるよう掛け合ったが、許可が下りなかったのだという。その後、定福庄西街の無許可経営者の前例を真似て、協力して違法な仮設建築物を建てるに至ったのである。住民自身の主張は、次のようにまとめられる。

（1）彼らは障がい者の自主創業者である。国策では自主創業が推奨されており、しかもその創業者が障がい者であれば猶更である。自分たちの障がい者としての身分を強調するために、彼らは勝手に定福庄中街を残街と改名したのだった[訳注2]。

（2）合法的な経営の道を求めながらも、関連部署から許可が下りなかった。つまり政府の冷淡と無精のせいで、彼らは違法手段を模索するよりなかったのである。しかも定福庄西街はもっと早くから違法建築が盛んで経営活動が営まれているのに封鎖されていないではないか。

（3）彼らは文明的で衛生的なサービス環境を自力で整備しようと試みたことがあり、さらには残街を模範的街道にしようと努力もしている。言い換えれば、彼らは自らの行動を通じて城管に認可され、最終的に営業許可を獲得しようと試みているのである。

こうした良い意図は、しかし、城管の認可を得るには至っていない。彼らの違法建築物は志半ばで撤去されてしまった。しかし、上述の35世帯が生存するための空間的資本として、残街の潜在的価値はついぞ低く見積もられることも、手放されることもなかった。違法建築物が撤去された後、彼らは再び歩道上に四角く線を引き、面積の大小に応じて価格を提示した。ここの公共空間は彼ら個人が所有するものであり、移動販売の露天商に貸し出すことで管理費を徴収するというのである。こうした露天商の業種は多岐にわたり、花や果物、ペット、衣服、アクセサリー、パソコンや携帯電話の部品などを販売するものだけでなく、理髪店、ごみ収集所、飲食店、飲料販売店、串焼き屋などもある。膨大な数に及ぶ学生という消費集団と周辺に密集する住民、残街のビジネスチャンスは決して小さくなかった。場所代を支払って歩道に出店する露天商の中には、値を釣り上げて、自分が支払った以上の場所代で他の露天商に場所をまた貸しする者さえいる。2005年から今日に至るまで、自称障がい者の住民たちが違法に公共空間を利用して個人あるいは小グループの利益を図っているが、この行為は都市管理条例に反しているだけでなく、現地の住民の日常生活にも影響を及ぼしており、このまま存在し続ける理由はどこにもないはずである。事実、多くの訴えが寄せられた後、さまざまな圧力に背中を押された結果、城管は何度か違法建築の撤去を実施してもいる。しかし道端経営者の戦術は非常に巧妙であり、戦略への反撃に成功する傾向にある。それは彼らが以下の点を察しているためである。

まず、城管の撤去・一掃行動はただの慣例行事に過ぎない。まさに歩道で個人経営を営むとある借主が述べるとおり、「定福庄中街と西街一帯は違法建築だらけだがこれだけ長い間誰も管理しようとしなかった。……最近はちょっと度が過ぎた、目立ちすぎたに違いない、あるいは上からの命令なんだろう」。慣例行事であるというのも、城管の業務はいわば嵐のようなもので、瞬く間にやって来るが、去るのも一瞬で、それもたまにやって来るにすぎないのである。

次に、群衆行動に対して法が寛容だという常識に照らし合わせて、露天商たちは城管の撤去行動が所詮はパフォーマンスに過ぎないことを知っている。彼らは口をそろえて次のように言う。「安心しな、これだけの人数（が道端経営を営んでいる）、（道を占拠する設備等を）撤去できるわけがないだろう？」。

さらに、先延ばし戦術とゲリラ戦術を長引かせることで、露天商は現下の環境を当たり前のものとして住民たちに適応させ、政府に投書するような考えをなくさせようとしているのである。

そして10数年が過ぎた今、残街の明らかな違法建築は撤去されたが、35世帯の住民はいぜんこの公共空間上の歩道で事業を営んでいる。彼らは私的に場所を貸し出し、借主と貸主が違法な交易関係を結んでいるのである。歩道上の経営行為は徐々に車道へも広がり、車道が歩道の機能も担うことになった。夏の夜にはここに串焼きの露店が一軒また一軒と立ち並び、残街は煙に包まれ、足元にはごみが散乱する。客たちは沿道あるいは車道上に座って飲み食いと談笑に興じる。その客の横を自動車と通行人が通り過ぎるが、巨大な扇風機が炭火の煙を吹き散らす。通行人は咳をし、顔を背けてその前を通り過ぎるのだが、それを避けることもできない。というのも、音もなくひっきりなしに往来する違法バイクタクシーが、まるで火の玉のような光の線を残して傍を駆け抜けてゆくためであり、それこそ通行人が細心の注意を払うべき最大の危険かもしれないのだ。

3. 日常生活実践の戦術と芸術

セルトーは、都市空間の実践をめぐる考えのなかで、次のように述べている。「私が探し出し

たい実践的行為は、可視的なパノラマとは違うし、理論的に構築される幾何的あるいは地理的空間とも異なる。こうした空間に関する計画は、ある種の具体的な操作形式（やり方）を、また別の空間性（空間に関する人類学的でポエティックで神秘的な経験）を、そして住まわれる都市の不透明で盲目的な変化を、思い起こさせる。一つの移転した都市は、あるいはメタファーの上での都市は、計画され閲読可能な都市の明晰なテクストの中へ、このようにして浸み込んでいくのだ」［塞托 2015：170］。まさに都市空間の具体的操作（都市空間の計画・設計ではない）に基づいて、社会生活の決定的条件が創造されるのであり、だからこそセルトーはミクロな空間的実践を都市の日常生活を理解するための鍵と見なしたのである。

しかし、セルトーの国家権力と社会機関に対する一貫した反抗を鑑みるとまったく不思議ではないのだが、彼はその都市空間的実践の研究において、いつも凝り固まった空間秩序の中から普通の人が微抵抗するブラウン運動を見出そうと試みている。そしていつも普通の人に秘められた思いもよらない資源を発見し、匿名の群衆の中において権力コントロールの真の境界線が生じる移動に対し、いつも特別に注目するのである。ミクロな視点で見る都市生活の実践において、それが個人によるものか群衆によるものかに関わらず、多くの活動が都市化システムの管理や取締の対象であることは理解に難くない。しかし、こうした活動は往々にして、監視とコントロールをすり抜けて存在し続ける。ひいては社会の管制ネットワークにすら入り込み、その隠れて営まれる創造行為に対して、すでに制御力を失った監督機関に目をつむるように働きかけるのである。もちろん、こうした多様で、反抗的で、また狡猾かつ執拗な生活的実践の戦術は、よく懲戒的コントロールから逃れる一方で、完全にその懲戒の力が及ぶ範囲外に存在することはできない。

同様に、残街で営まれる日常生活的実践もまた、上述のような道端経営者の違法行為だけに留まらない。たとえば普通の通行人が歩き、足を止める、そして記憶し、語る、こうした実践的行為はある種の空間の文体学を構成しており、それは残街をめぐる空間の文法学とは異なる様を呈している。

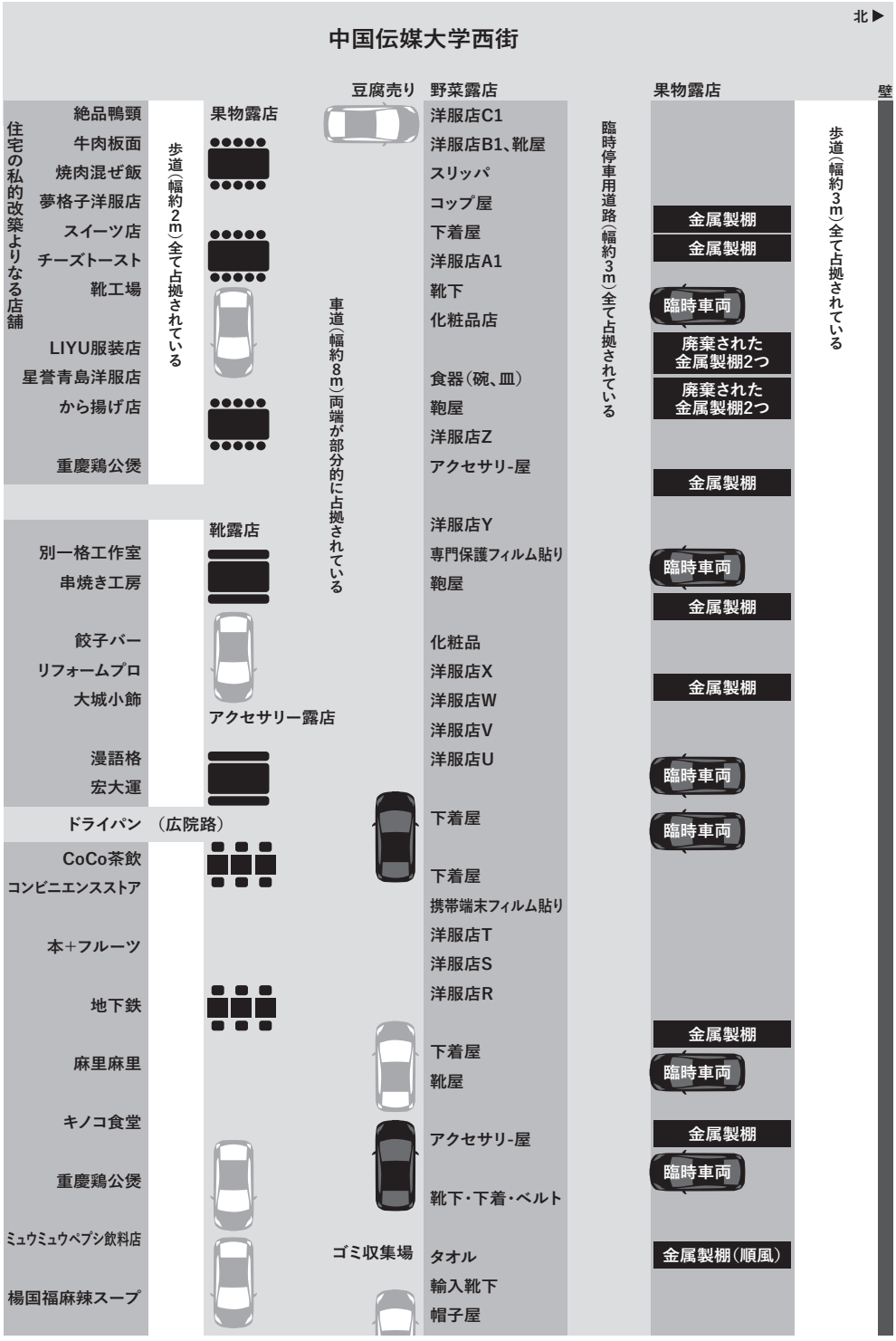
（1）残街を歩く

都市の整備者、設計者及び管理者の立場から見れば、空間設置は文法学者と言語学者が定める原義のようなものであり、それは標準化、正常化された言語規範であると同時に、すべての派生語が参考にするフレーム、即ち空間の文法なのである。しかし、「私たちは日常や言語、あるいは歩行者の使い方においていぜんとして見つけられずにいる」［塞托 2015：178］。この意味において、都市の街道を歩くことは、文法規則に沿って言語で語ることと同じようなものだといえる。

残街を歩く者は誰しも、あらかじめセットされた残街の空間に自然と適応してゆく。こうした自然的空間と人工的空間のプリセットが、この歩行者にある種の可能性（彼は通行することができる）と制限性（目の前に何か障害物があって通れない）を与えるためである。また、それらは彼が他の可能性と制限性を発明することも促す。たとえば車道を横切る、道を変える、あるいは足を止めてある空間的要素を一時的に注視する、あるいは疾走してそれを無視する等がそうである。言い換えれば、通行人はすでにある空間的秩序内の可能性と制限性を現実のものとする。彼らは確かに残街を通り過ぎるのだが、その通り過ぎる際の可能性と制限性は無限に豊かなのである。彼らは自分の歩くルートを発明し、選び、また別ルートを排除する。この選択と排除の過程は、彼らがその足取りを通じて創造的に発明する空間のレトリックであり、これを通じて道端経営者やその他の通行人と社会的関係が結ばれる。まさにこの空間のレトリックの構築、引用あるいは対立、断絶によって、通行人は自分たちが選択したルートについて証明、懐疑、試行錯誤、超越、

残街平面図

一時停車する車両　歩道を長期占拠する放置車両　電柱



厳守等の行為を実践するのである。

通行人の空間のレトリックは、フロイトが述べる置換と濃縮という夢の働きに呼応している。前者は部分的空間を強調することで空間全体を代表し、後者は連続的空間を省略することで空間

中国伝媒大学西門

の真実性を解消する。このような働きの結果、通行人のまなざしの中の残街は、都市計画者の設計する地理的空間でもなく、また商売人が歩道を占拠した後わずかに残る空間でもない、その足の下の街道は地理空間的な意味における街道ではないのである。彼らの足取りは街道を加工し、

この地理的空間をひっくり返す。空間のある部分は誇張され、ひいては全体を代表している。街道の連続性は孤立した景観へと分断される。地理的空間として残街がもつ連続性と統計的な数量は、すべて主観的な感受性と語りにとってかわられ、歩行者の歩くスタイルと姿を通じて体現される。こうした空間のレトリックは固定化できない。記録し尽くすこともできない。しかしまさにそれを通じて、都市空間の設計と計画の原義は脱構築され、歪曲されるのである。

(2) 残街を語る

特定の生活区域としての残街は、多くの住民が長年暮らす環境であると同時に、多くの人々（例えば大学生）が一時的に生活する環境でもある。社会の変容は瞬く間に残街の歴史的風貌を変え、史跡に付随する文化的記憶を埋もれさせてゆく。残街の生活区に暮らす人々にとって、残街は長い歴史を有しており、つまりそれだけ感情に温められている。どれほど雑然とし、秩序に欠けていようとも、まさにある古くからの住民が述べるように「我が家はここなんだ、私はここで生まれ育った」のである。この場所は彼らにとって特別である。いたるところに物語があり、記憶が染みついている。中国伝媒大学の卒業生ですら、とっくの昔に潰れてしまった記憶の中の食堂や飲料店を懐かしがる。残街をぶらぶら歩いていると目に入ってくる目印が、通行人や住民の歴史的記憶と語りを展開するための目次となることもあるだろう。その記憶と語りはまるで貼り絵のようで、言及される要素間の関係性は曖昧である。それは地理的空間上で行われる一種の叙事性の空間的実践である。言い換えるなら、それは構造化された空間テクストの上に創造されたある種の反テクストであり、この反テクストは既存の空間テクストの意味を天然に歪曲し、移植し、変更する。さらに他の空間的意義へ向わせる可能性と潜在能力を有している。

しかも異なる主体の記憶は分散的で、取りまとめがないものであり、当然のことながら位置づけなどできない。残街に関する記憶はほとんどが人々の脳内に眠っており、特定の場合に主体によって呼び覚まされる。ここの住民たちはしばしば「あんたたちは知らないだろうけど、ここはかつて……」と口にするが、「かつて」とはその事象がすでに消失し、もはや見ることはできないことを意味している。それらは可視的な目印の背後の歴史の皺の間に隠されている。多くの場合は個人的な記憶に過ぎず、他人の興味を引くことも難しい。しかし、都市の普通の生活者にとって、生活空間に関する歴史的記憶はその地区の魂の所在そのものである。この意味において、人々が残街で足を止め、懐かしむのは、この場所に断片化された秘められた物語があるためである。それらは喧騒に満ち、乱雑極まりない空間テクストの背後に隠されている。まるで積み重ねられた時間のようでありながら、主体の記憶の中に消失している。正確に言えば、こうした場所は一種の特別な記号であり、通行人にある種の楽しい、あるいは辛い体験を呼び覚ますのである。

人々が街道を歩き、立ち止まったことに対する思い出と語りは、ある意味、前述の空間のレトリックに対する補足であり、具体化である。また、空間的実践の可能な各種行為についての記述でもある。特定の個人あるいは集団の空間をめぐるどんな理解も、彼（あるいは彼ら）の空間の大小、境界線及びその性質に対する理解と無関係ではなく、こうしたいくつかの基本的な尺度に基づいて、空間の意味と分類の問題において意見の相違が生まれるのである。空間をめぐる意見の相違及びそれに関連する語りは、空間で営まれる実践（パフォーマンス）の前提にすらなる。様々な行為が演じられる舞台を創造し、つまり、人々が行動をとるための空間を提供するのである。たとえば、残街中段の北側にある歩道上に、中型トラックが長年停車してあるが、ここはある中年夫婦がゴミを回収する場所になっており、歩道ばかりか、車道上の大きな空間も占領されている。この夫妻が道端経営に従事するに至った歴史語りは、彼らがこの場所で展開する社会的実践

行為に、合法的な舞台を提供する。言い換えるならば、空間に関する語りは、空間的実践に先行することがある。前者が後者のために場を開拓し、可能性を提供するのだ。

残街を歩き、足を止める、歩行者たちは既定の公共空間の秩序を操作しながら、記号システムとしての公共空間を創造的に触発し、再構築する。地理学的な意味で非常に明確な街道の背後に――歩くことと語ることを通じて――無数の曖昧で境界も不鮮明な街道が存在している。通行人の足取りがある場所を超え、組み立てるが、それはその場所について選択を加え、全体像へ組み込んでいるのである。そして相互に矛盾し、ぶつかり合うセンテンスとルートが創造される。結局、残街を歩き、語ることは、日常生活的実践の戦術と芸術として、二重の意味で残街の空間的輪郭を曖昧にするのである。

4. 秩序と実践を超えて

セルトーが空間計画と空間使用、戦略と戦術について行った区分は、日常生活的実践を理解する際に非常に啓発的である。計画と戦略は現代的な論理に基づいて生じたディスコース体系であり、理性への至上の崇拝と信仰が前提となっている。それは次のように信じている。「理知が世界を構築あるいは修復すべきであり、またそれが可能なのだ。我々はもはやある秩序あるいは隠された作者の秘密を読む必要はなく、むしろ秩序を生み出し、この秩序を野蛮なあるいは堕落した社会の躯体の上に書き記すのだ。この歴史を正し、征服し、教育するために、書くという行為は歴史に対しての権利を獲得したのだ」［塞托 2015：233］。一方、使用と戦術は、生きた体が無視されたり押さえつけられたりした際に発する叫びであり、声にならない苦しみである。この意味において、セルトーが実践の芸術を強調したのも、ポストモダン的な反抗的努力なのだった。

モダンとポストモダンに関するアカデミックな内省は、中国民俗学の思索を直接的に強く触発した。一部の民俗学者は未完成のモダニズム理論を手に、中国はより徹底的な現代化改革を急ぐべきだと考えた。また、ある者は防ぎようのないポストモダニズムの流れに同情を寄せ、中国はすでにニューメディアやニューテクノロジーに巻き込まれながら情報化と消費社会に突入しており、あらゆるモダニズムの悪弊が中国社会を苦しめている、しかも現代化した理性を堅持する主体自身が、何かしら普遍的価値を有する旗印を掲げながらも実際は利己的な社会的主張を行っているかもしれない、と考えている。なんにせよ、現代的理性そのものが顧みられ、疑われなければならないのだ。

公共秩序と私的実践とは、自然と対立し合うものなのだろうか。セルトーは製品の生産と製品の使用プロセスに隠された副次的生産の間の差異と類似性に注目した時、両者間に永久的な差異が存在することを潜在的に認めながらも、分断不可能な相互依存性の存在もまた強調している。さらに、セルトーは公共秩序の社会的重要性をめぐる議論を棚上げにして、私的実践の潜在的意義と価値を直接指摘しているが、これもセルトーの理論が中国の日常生活的実践の研究にそぐわない点である［渠 2017］。社会の公共的法則の使用者が社会の法則を自分の追い求めるメタファーと省略のレトリックへ変えていると指摘する際、彼はフランスの社会生活において公共的法則が覇権的地位にあると仮定しているが、一方中国の都市において――残街は中国の現代都市の縮図である――、人々はいかなる公共空間も私的な欲望と利益を図る原始的森林とみなしており、公共的法則は形骸化しているのである。

セルトーのポストモダン色の強い思想は、中国社会を理解するのには不向きかもしれない。し

かし、それは極端な現代化がもたらす社会的弊害へ警鐘を鳴らす。将来中国都市部の日常生活を育むには、普通の人々の秩序意識を強化しなければならず、同時に人々の普遍的な心理的需要を尊重しなければならない。中国の民俗学者は中国の民衆の将来的な日常生活的実践に注目しているが、二つの仕事を同時に展開しなければならないだろう。一つは西洋文明の総体的フレーム内で現代をめぐる問題を顧みること、そしてもう一つが、中国自身の文化的伝統の中で現代の危機を溶解するための出口を探すことである。

訳注

1　本稿では道端経営と和訳したが、原稿では「占道経営」となっており、公道を不当に占拠するというニュアンスがより強調されている。

2　障がい者は中国語で「残疾」と言い、残街の「残」は障がい者を表している。

参考文献

Certeau, Michel de 1988, *The Practice of Everyday Life*, University of California Press.
渠敬東 2017「『山水』没落與現代中国的精神危機」『文化縦横』
塞托、米歇爾・德 2015『日常生活実践：1、実践的芸術』南京大学出版社